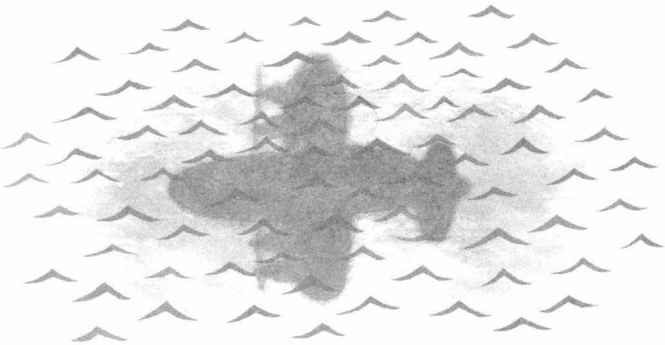
南の島の



榆出版

南の島のティオ
一九九二年一月十六日第一刷発行
一九九二年二月十四日第二刷発行
定価一四〇〇円（本体一三五九円）
著　者　池澤夏樹
発行者　高橋日比夫
発行所　株式会社楡出版
〒141東京都品川区上大崎二―十九―九
電話〇三（三四九三）五七三〇
印刷所　株式会社加藤文明社
製本所　和田製本工業株式会社

©Natsuki Ikezawa 1992　Printed in Japan
ISBN4-931266-09-6 C0093 P1400E
万一落丁乱丁の場合はお取り替えいたします。

南の島のティオ　目次

絵はがき屋さん　5
草色の空への水路　35
空いっぱいの大きな絵　59
十字路に埋めた宝物　89
昔、天を支えていた木　113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

地球にひっぱられた男　135
帰りたくなかった二人　159
ホセさんの尋ね人　185
星が透けて見える大きな身体　237
エミリオの出発

装幀　杉浦範茂

絵はがき屋さん

飛行機は週に三度、月曜と水曜と日曜に島にやってくる。

いつもならぼくたちはその日の便で出発するお客をマイクロ・バスに乗せて、飛行機の到着する三十分ほど前に空港にゆくのだが、その日はたまたまうちのホテルには島を出るお客はいなかった。父とぼくがいつもより遅く空港に着いて、車を置き、パンダナスの葉で屋根を葺いたターミナルに入ると、もうかすかな爆音がオレンジ色に染まった西の空から響いてきた。東風に逆らって飛行機は着陸し、滑走路の端まで走っていって、また轟々とあたりの空気を揺がしながらターミナルの前へ戻ってきた。

二、三十人の乗客が飛行機から降りた。それぞれ鞄を肩から下げ、荷物を手にして、ターミナルに向かって歩きはじめる。みんなの長い影が平らな広いアスファルトの上に揺れた。ぼくはいつものようにホテルの名前を書いたプラカードを手に、ターミナルの横でその人たちを見ていた。

夕日に照らされたその行列の真中あたりにいた一人が、ふと足を止め、西の空、逆光の中にくっきりと黒い姿を見せているクランポクの山を見た。あまり

若くない女の人、たぶん日本人だろう。ほかの人たちは彼女の脇をどんどんターミナルの方に歩いていた。列の最後の一人が彼女の横を通り抜けて、十メートルほども間があいた時、じっと山を見ていたその人はやっと気がついて、大きな鞄をゆすりながら早足で後を追い、ターミナルに向かった。

旅券審査と税関の検査を終った人たちがターミナルから出てくるのをぼくはプラカードを掲げて待った。父は知っている顔を何人か見つけて、握手をしたり、肩を叩いたり、笑ったりしている。うちのお客は四人のはずだった。二人は政庁関係、一人は船会社で、この三人は常連だった。残る一人はエージェントの電報ではなく自分で書いた手紙で予約をしてきた日本人で、たぶん気紛れな観光客だろうと父は言った。

到着した人々はそれぞれに親戚や同僚やホテルの出迎えを受け、いくつものトランクを車に積んで、島のあちこちへ散っていった。うちの常連たちもマイクロ・バスに乗りこんで、残る一人が来るのを待っていた。しかしぼくの持っているプラカードを見て寄ってくる人はいない。もう税関の検査の列は最

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

後の一人になっている。さっき立ち止まって山を見ていた女の人だった。父がその人のところへ行って声を掛け、ぼくの方を指さした。彼女は不審な顔をし、それからぼくが掲げているプラカードを見ると、笑って何か言った。父が彼女のトランクを手に下げてマイクロ・バスに向かって歩きはじめた。

「いいところね、ここは」とその人はぼくに言った。

ぼくは部屋の奥にトランクを置いたところだった。彼女は部屋の戸口に立ってクランポクの山の上に拡がる星空を見ている。ぼくとあまり変わらないくらい背が低くて、日本人としては肥った方だ。まるい、人なつこそうな顔をしていた。

「島へは初めてですか？」とぼくはたずねた。

「そう、でもあの山、ずっと前から知っているような気がするわ」

やっぱり絵はがきのお客だなとぼくは思った。彼女を食堂へ案内しながら、これで何人目だろうかと考えた。数十人というところだろうが、絵はがきのお

客かどうかはっきりしない人もいたから、正確な数はわからない。
食堂には五、六組のお客があちらこちらに散ってテーブルについていた。ぼくは壁の黒板に書いてあるその日の夕食のメニューを彼女に示した。奥の調理場から父が出てきた。
「どうですか、部屋は？　気に入りましたか？」と父が言った。
「ええ、いい部屋だわ」
「この島には初めてですか？」と父はぼくと同じことを聞く。
「そう、でもね、去年わたしの弟がここに来たの。弟は文化人類学を勉強している学生で、先生や五人ほどの仲間とここへリサーチに来たのよ」
「ええ、ここに泊まられました」と父は言った。そのリサーチのため、父は毎夜ジープを飛ばして島の奥の方の村をまわり、よそものを嫌う長老たちを説得して段取りをつけるのにずいぶん苦労したのだ。
「その時、弟はここからわたしに絵はがきをくれたの。普段はそんなことをする子じゃないんだけど」

「その絵はがきを見ているうちに、ここに来たくなったわけですね」と父はなにげなく言った。

「あら、よくおわかりね。旅行といったらヨーロッパにしか行かないわたしが、珍しくこんなところへ来たくなったの。あの山よ。あの山の写真に誘われたの」

絵はがきは三種類あって、クランポクの山を写したのはそのうちの一枚だった。クランポクはこの島の象徴だ。町の西側に、小さな湾を隔ててそびえるその山は、さほど高いわけではないが、特別にぎざぎざした形が目立って、切手になったり、父が注文したホテルの専用便箋のマークになったりしている。島を出た者が戻ってくると、まずクランポクを見上げて、やっと島に帰ってきたのだと得心する。残る二種類の絵はがきは、うちのホテルの全景と山の奥の方に咲く白いランの花だった。

この人はクランポクの写真に惹かれて来たのだが、絵はがきに誘われて来た人は、そこに写ったものを必ず自分の目で見たがる。山やホテルならすぐにも

見られるからいいが、白い花となると相当の山歩きをしなくてはならない。案内に立つのはいつもぼくの仕事だ。ぼくは山に慣れているけれども、お客の方が年を取った人だったりすると、叢林の中の細い険しい道を辿って花の咲くところまで行くのはなかなか大変なことだった。

この人は明日ここから山を見てひとまず満足し、町を歩き、あとはモーターボートでグラガルーギナの遺跡を見に行くか、礁湖の中の小さな島に渡って浅い海で泳ぐか、そんなことで終るだろう。そしてこの島に滞在した日数分だけ幸福になって帰ってゆくだろう。

絵はがき屋さんが来たのは一年ちょっと前のことだ。たぶん飛行機で来たのだろう。うちに泊まるという予約は入っていなかったし、ふらりと顔を出したのもたしか飛行機の来ない日だった。他のホテルからここへ来たのかもしれない。

ともかく、その日の夕方、ぼくが食堂で誰かの置いていった漫画本を見てい

ると、若い男の人が一人やってきて、部屋はあるかとたずねた。うちの二十室が一杯になることはまずないから、その時ももちろん部屋はあった。痩せた元気そうな人で、なにか楽しい話をはじめる前のようににこにこしていた。重そうな鞄と写真用の三脚を持っている。東洋人と白人の両方の血がちょうど半々に混っているように見えた。ハワイかフィリピンの人だろうとぼくは考えた。部屋はありますとぼくは答えた。

「ぼくはピップだ。きみは？」

「ティオです」

「きみがこのホテルの経営者かい？」

これは冗談だ。十二歳のぼくが経営者に見えるはずがない。

「いえ、経営者は父です。ぼくは手伝うだけ」

「そうか、それは残念。きみだったら話が早そうなのに。あとでお父さんに会えるかな？」

「今は出かけていますが、夕食までには戻ると思います」と、ぼくならば話が

早いというのは何のことだろうと考えながら、ぼくは答えた。

しかし、観光局の会議に出ていた父が帰ってきたのは九時近くなってからだった。若いお客は夕食の後、紙と鉛筆を前に何か書きながら待っていた。ずいぶん熱心に書いているように見えた。他のテーブルに料理を運びながらちらっと見ると、彼は魚の絵を描いていたのだ。大きなヒラアジを精密に、鱗の一枚ずつまでゆっくりと丁寧に描く。テーブルの上に魚はなかったから、すっかり魚の形を覚えているのだろう。ぼくは料理のトレイを持ったまま思わず足を止めて、その絵を見た。ピップさんはぼくの顔を見上げて、にっこりと笑った。

父が戻ったので、ぼくはこの奇妙なお客のことを話した。父は彼のテーブルに行き、声をかけて椅子に坐った。お客はいかにも楽しそうにニコニコしながら、何か言った。父が笑った。気楽に世間話をしているように見えた。父はぼくに合図して、「ビールを持っておいで」と言った。ぼくはビールを二罐そのテーブルに運んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com